

評者は著者とともに、エリウゲナが否定神学と非存在あるいは無の概念を強調することを認める。しかしそれらは、観念論の弁証法とは異なり、万物を越え、何の範疇をもつてもとらえられない神の超越性を示すために強調されているのである。

---

Werner Beierwaltes (hrsg.):  
*Begriff und Metapher.*  
*Sprachform des Denkens bei Eriugena.*

Heidelberg 1990

熊田陽一郎

本書は1989年7月、ドイツのバード・ホムブルグで開催された第7回国際エリウゲナ学会における講演を収録したもので、我々にも幾多の知的刺戟を与えてくれるものである。タイトルが示すように、内容はエリウゲナの思想とその言語的表現の関わりについて論じたものが多いが、ここでは特に彼の基本思想である「神現」(theophania) に関わる論文を中心に、若干の紹介を試みたい。

冒頭に Giulio d'Onofrio, *Über die Natur der Einteilung. Die dialektische Entfaltung von Eriugenas Denken* が置かれている。この「区分の本性について」というタイトルは、エリウゲナの主著「自然の区分について」の顛倒であらう。些かのユーモアをこめて、自然区分論の区分の面に注目したものである。即ちこの区分がどのような論理学的手続きによって行われたかを考察し、これがそのまま神学的方法につながることを指摘しているのは、以下の諸論文の流れを暗示するものといえよう。即ち偽ディオニシオス以来の伝統としてエリウゲナの思想を形成する肯定・否定の両神学において、肯定神学は世界の事物について語られた言葉を神に転用するのだから、先づ世界についての正確に分節された言葉が必要であり、従って正確な区分 (diairetiké) の手続きが必要になる。そしてこの区分に対してキリスト教神学においては、神による創造と人間の墮落による世界の「分化」が対応し、これは新プラトン思想では一からの多の「発出」として表現される。他方否定神学においては、この分化した世界についての言葉を否定して神に至らうとするもので、論理学的には多者を統合する

analytiké の動きとなる。これにはキリスト教では救済論的終末論的な「合一」が対応し、新プラトンのには一者への「帰還」の動きとなる。

このようにして論理学と神学の基本的な対応関係を認めた上で、アリストテレス以来の「区分」についての論理的法則を概観し、これに基づいてエリウゲナの「区分」を検討する、そこには様々の欠陥や不整合が現われるが、筆者はこれを知性と理性という人間の認識能力の間の分裂として説明する。即ち人間が知的直観によって把握した超越的対象を、理性的論理に従って区分し統一しつつ記述する時に必然的に生じてくる矛盾である。

それは確かにその通りなのだが、折角区分についての論理的検証を進めながら、その矛盾をすべて知的直観と理性的論理との差異に帰してしまうのは、やゝ結論を急ぎ過ぎる嫌いがあるのではないか？ これらの不整合は結局、エリウゲナの基本的問題であるフィシスと神と世界の三概念に関わるものであるから、これについてのより突込んだ検討が望まれるのである。フィシスという、神と世界を包括する普遍概念はいかにして正当化されるのか、初めはフィシスの区分肢として現われた神（創り創られないフィシス+創らず創られないフィシス）が、最後にはその「区分さるべき全体」と同じ普遍性を獲得してしまうのはいかなる論理学的手続きによるものか、このような素朴でしかも基本的疑問に対して筆者はまだ答えていないように見える。

W. Beierwaltes, *Duplex Theoria, Zu einer Denkform Eriugenas*. これは同じくエリウゲナの思想とその表現形式について、二重の観照、即ち魂の視る働きの二重性という見地から考察したものである。

彼の出発点は、人間の言語というものは神自体を表現するためには本来的に不充分であるという認識にある。しかし逆にそれだからこそ、人間の言語は神の現われであるこの世界に正確に対応する。或る一つの言語体系は、それ自体一つの世界として神の自己開示となる。その際言語世界のなかに「対立」「差異」として現われるものを、我々は先づ二つの方向に向う魂の視線をもって眺めている。例えば生物と無生物、知と無知、存在と非存在。このような世界における分裂差異を一方で二方向の視線をもって見てとりながら、これらがその根源であり目的である神自身においては統一されていることを同時に観てゆくのが、二重観照ということになる。

この二重観照は四区分の各項とその相互の関係において検証されるが、我々人間にとって最も身近であり且つ意味をもつのは、神現としてのこの世界について行われる

二重観照である。我々は先づ感覚をもってこの世界を眺め、そのデータを自然学的に整理し体系化してゆく。そしてこのようにして成立した世界をそのまま、我々は唯一にして不可視・不可知なる神の顕現として観るのである。我々は日常坐臥、この二重観照のなかに生きることになる。

こうして我々がこの世界を観る眼が常に二重であるとすれば、そこにメタファという表現形式が、我々の言語の本質を示すものとして浮び上ってくる。我々の世界の事物についての言葉はすべて、自然的に見たその事物の形を示すと共に、自らではない不可視なものへと「移りゆくもの」(meta-phora) 即ち比喩に外ならない。我々の言語はすべてこの根源的意味におけるメタファである。

そこでバイアヴァルテスは比喩のもつ発見的 (heuristisch) な機能に注目する。即ち一つの形相を示す言葉は、正にその形ゆえに、自らの形とは反対の方向にある形を、連想的に喚起し造形してゆく。例えば光という言葉は、その自然的諸性質のもつ形から肯定的な力で精神と神とを指示してゆくが、同時に闇という対立語に自らを転化しつつ、その方向にも精神と神との形を喚起し造形してゆく。こうして二重観照という概念は、本書のテーマである「概念とメタファ」の関わりを照し出すに適したものであることが明らかになる。

即ちこの世界の事物から採られた一つ概念が比喩としての性格を露わす時、必ずその反対の概念と表象とを、否定・過剰の両方向に喚起してゆく。我々の視線は先づ両方向に分裂し、最後には一つの視に収斂して二重の観照が成立する。これが神現としての世界に対する我々の認識と表現の動きである。

こうして始まった人間の言語と神現である世界についての考察は、J. McEvoy, *Metaphors of Light and Metaphysics of Light in Eriugena* においても中心的課題となっている。これはボイムカー以来の光の比喩と光の形而上学の問題を、エリウゲナの光言語において解明しようとしたものである。

ここで氏はまづ光という言葉について、太陽から発する宇宙的光と人間の内的光という二つの問題位相に分けている。そしてその各々についてエリウゲナのテキストから、

1. 先づ自然学的記述によって、両方の光概念の内容を示し。
2. 次にこれに基づいて光の比喩的内容を解明する。
3. 最後にこの両者の弁証法的展開において、彼の思想の特質を示そうとする。

このように太陽光と内的光についての自然的記述と比喩的理解を重ね深めてゆく時、その弁証法的関わりの中からは、「神現」の概念が理解されてくる。即ち神はそれ自体としては存在を越えたものであり、不可視・不可知であるが、自らの創る世界において自らを創り、存在化して現われてくる。そして人間に働きかけて、これを理解せしめる。即ちこの神現という業が行われる場が人間の知性なのであり、これについて、「空気を照す光」の比喩が提出される。光はそれ自体としては人間の眼に見られないが、ただ空気を媒体として、輝き現われる。そして一度このように輝く時、我々の眼には空気は消えて、すべては光に変わったように見える。不可視・不可知なる神はただ人間の知性を介してのみ世界として現われるが、一度このようにして現われた時、我々の知性における世界は、すべて神となって輝くのである。

こうして光という言葉は、太陽光と視る光という兩位相を統合した形で、エリウゲナの神現の思想を示す根源語乃至絶対比喩になる。即ち光という言葉は、現われてくる神について先づ語られるべきなのであり、そこから「転用」(meta-pherein)されて初めて、太陽光と我々の内的光について語られるのである。なぜなら太陽光も我々の理解も、神現という光の放射に外ならぬからである。このような比喩の方向の逆転は、ポイムカーがすでに光の形而上学の特質として挙げていたものである。

最後に P. Doronke, *Eriugena's. Earthly Paradise* を考察しよう。地上のパラダイスとは人間に根源的な両性具有のあり方である。これはエリウゲナが、プラトンからギリシヤ教父を介して受け容れたもので、原始に神の似姿として創られた人間は男女両性を統合した自己充足的存在であったが、罪の結果として両性に分割された。しかしキリストの救いによる終末的完成においては「男も女もない」原始の完全な状態が回復される。その時に大地はパラダイスと合一し、地は天と、物質界は精神界と、そして全被造物は神と合一する。即ち人間の統一と区分とは、全体の統一と区分の契機でありその可視的現われなのである。ここでも我々は二重観照を体験する。即ち現在の状況において区分された男女の愛を見ることによって、同時に我々は終末的に統合された、人間と全存在の合一の姿をも観照することができるのだから。ドロンケ氏がその歴史的視野のなかに、エリウゲナの間接的影響も見られるという「トリスタンとイゾルデの物語」をも含め考察していることは、この点から見ても示唆に富むものである。「Tristan Isolt, Isolt Tristan... sus was er si und si was er...」と歌うイゾルデの訣別の歌は、男女の合一する愛の超越的性格を示し、そしてこれはそのまま

エリウゲナの教えた原初と終末の超越的合一性を指示するのである。

こうして神現として視られたこの世界は、論理的思考と二重観照と光言語と愛と、これらすべての人間の働きのもつ合一の力によって、区分を止揚されて見えざる神の統一に向うのである。

その外の論文については以下の通りである。

- (1) エリウゲナの思想の主要な概念とその比喩的意味内容についての論文。
  - a 創造・発出について GANGOLF SCHRIMPF, Der Begriff des Elements in Periphyseon III. GUSTAVO PIEMONTE, Image et contenu intelligible dans la conception érigénienne de la 'diffusio dei'
  - b 神の内的自己媒介が世界と人間の形成に果す役割。 GUY-ALLARD, "Medietas" chez Jean Scot.
  - c 帰還について。 STEPHEN GERSH, The Structure of the Return in Eriugena's Periphyseon.
- (2) 数乃至数学的思考のもつ意味について  
ÉDOUARD JEAUNEAU, Jean-Scot et la Métaphysique des Nombres.  
DOMINIC O'MEARA, The metaphysical Use of mathematical Concepts in Eriugena.
- (3) 人間のもつ意味  
ALOIS M. HAAS, Homo-medietas. Sinn und Tragweite von Eriugenas Metapher vom Menschen als einer 'dritten Welt'. WILLEMIEN OTTEN, The Universe of Nature and the Universe of Man: Difference and Identity.
- (4) 真理の範型としての聖書  
RAINIER BRUEREN, Die Schrift als Paradigma der Wahrheit. Gedanken zum Vorbegriff der Metaphysik bei Johannes Scotus Eriugena.